

## 第6回「阪神・淡路大震災とアート」

### 【話題提供】

江上ゆか

兵庫県立美術館学芸員

1969年兵庫県川西市生まれ。1992年より兵庫県立近代美術館に学芸員として勤務（2002年に移転、兵庫県立美術館と改称）。近現代美術の展覧会を担当し、阪神・淡路大震災に関連した以下の企画に関わる。「震災から5年 震災と美術—1.17から生まれたもの」（2000年）、「震災から10年」記念事業「建築物経年変化保存計画 ウクレレとナミイタの展示」（2005年）、「阪神・淡路大震災から20年」（2014-15年）、「注目作家紹介プログラムチャンネル7 高橋耕平—街の仮縫い、個と歩み」（2016年）。その他、直近の担当展に「関西の80年代」（2022年）など。

高森順子

社会心理学者、阪神大震災を記録しつづける会事務局長

1984年兵庫県神戸市生まれ。大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了。博士（人間科学）。1995年阪神・淡路大震災の経験を表現する人々とともにアクションリサーチを行い、被災体験の分有のあり方について研究している。2014年に井植文化賞（報道出版部門）受賞。近著に『10年目の手記—震災体験を書く、よむ、編みなおす』（瀬尾 夏美・中村大地・佐藤李青らとの共著、生きのびるブックス、2022年）。2023年3月に『震災後のエスノグラフィー「記録しつづける会」のアクションリサーチ』（明石書店）を上梓。

### 【コメント】

清水葉月（一般社団法人 Smart Supply Vision）

【江上ゆか】

阪神・淡路大震災は、美術館に勤めて数年後のことでした。自宅も近親者も無事だったので、私は自身をいわゆる「被災者」ではないと思っています。ただ、被災館となる美術館で、節目ごとに震災にまつわる企画に携わってきました。

今回は、2つのポイントを念頭にお話しします。

1つ目は、「当事者・非当事者」ということ、言い換えれば「物事との時間的・場所的な距離」のこと。2つ目は、「資料やモノを保存し、それを活用して伝える」ことです。

#### ◇震災と兵庫県立美術館

兵庫県立美術館は、1970年から2001年まで、兵庫県立近代美術館<sup>1</sup>という名で、神戸の繁華街三宮の一駅先の灘駅北側にあり、震災で被害の大きかった地域に接する場所でした。2002年からは、約2キロ真南の海沿いの埋め立てエリアに移転し、兵庫県立美術館という名に変わりました。

美術館では、所蔵作品38点に被害がありましたが、早朝の地震で人的被害は出ませんでした。



#### ◇5年目：震災のディテールを幅広く拾う

被災し復旧した建物で、震災から5年目に「震災と美術」という特別展を開催しました。震災後、非常に多く生まれた震災に関する作品を、できるだけ幅広く集め、展示しました。

<sup>1</sup> 兵庫県立近代美術館の建物は、現在、横尾忠則現代美術館及び原田の森ギャラリーとして利用されている。

当時、プロからアマチュアまで、震災の体験を何らかの形で残さずにいられなかった人が地域に非常にたくさんいたことを伝え、残したいという趣旨の企画でした。

震災の直接的な描写を含む展覧会だったので、災後 5 年目でも、見るのが辛いという声がありました。しかし、あまり時間が過ぎてしまうと、当時何があったかさえ辿りづらくなります。5 年目だからこそ、ディテールを幅広く拾う展覧会を実現できたと思います。

## 5年目(2000年)の企画

### 「震災から5年 震災と美術—1.17から生まれたもの」

会期：2000年1月15日—3月20日

会場：兵庫県立近代美術館 特別展示室ほか

担当：平井章一(現・関西大学)、江上ゆか

内容：阪神・淡路大震災を直接に扱った表現を幅広く紹介(例：絵本や子どもの絵も含む)

\* 5年目だから実現出来た展覧会



震災と美術展 会場風景

作品収集の際難しかったのは、どこまでが「震災に関わる」「作品」なのかという判断でした。例えば、チャリティイベントは作品ではない。そこで、展示では紹介しづらい動きも含めて、災後、被災エリアの美術を巡って何が起こったか、非常に詳細な年譜を展覧会カタログに載せました。

## ◇10年目：距離を置く/拡張する

震災から7年目の2002年、美術館は、兵庫県が謳う創造的復興のシンボルとして移転。周囲には災害復興住宅、人と防災未来センター<sup>2</sup>があります。

新しい美術館で迎えた10年目、2つの事業を行いました。1つは、「再生」をテーマとした絵画の国際公募展。2つ目は、「震災から10年」記念事業。移転先のHAT神戸<sup>3</sup>のにぎわいづくりとして、映画、コンサートなど、震災後、館が日常的に続けてきた取り組みに視線を向け、震災との距離感も多様なイベントを開催しました。

私は、美術作家・伊達伸明さんの「建築物経年変化保存計画 ウクレレとナミイタの展示」

<sup>2</sup> 阪神・淡路大震災の経験と教訓を後世に伝え、これからの備えを学ぶ防災学習施設。

<sup>3</sup> Happy Active Town 神戸 (はっと神戸)：震災復興のための埋め立て地にある、まちのエリア。

という小規模な展示を企画しました。取り壊しになる建物から切り出した材で作られたウクレレと、苔やサビのついた、地層を思わせる表情を見せるトタンを四角いフレームで切り取った写真の展示です。どちらも人間の生活の中で見過ごされがちなささやかな、しかし思いがけない美しさが切り取られています。

#### 10年目の企画

#### 「震災から10年」記念事業 「建築物経年変化保存計画 ウクレレとナミイタの展示」

期間：2005年2月11日—2月20日 会場：兵庫県立美術館 アトリエ1



会場風景

5年目の企画では、あのタイミングでやった意義を感じつつも、直接的な描写によって辛くなる来館者がいたことに考え込んでしまいました。だから、10年目の企画では、直接的な震災というよりも、少し距離を置きながら、「日常/非日常」「記憶と継承」といった問題を拡張して、鑑賞者の心にふわっと広がって染み渡るような展覧会を試みたいと考えました。

#### ◇20年目：いろんな時間と距離を含み込む

20年目には、常設展示室で「阪神・淡路大震災から20年」という展示と、周囲の施設と連携したリレートークを行いました。

展覧会は、3部構成。震災を起点に、当時からタイムライン的に振り返る第2部を挟んで、第1部は過去を、第3部は未来を向いています。

## 20年目の企画

### 「阪神・淡路大震災から20年」

会期：2014年11月22日—2015年3月8日  
会場：兵庫県立美術館 常設展示室1～4, 6  
担当：出原均(第1部)、江上ゆか(第2部・第3部)、小野尚子

内容：第1部 自然、その脅威と美  
近代以降の美術における自然の表現  
第2部 今、振りかえる—1.17から  
※さらに3パートで構成  
第3部 10年、20年、そしてそれから—米田知子  
震災10年目の作品を20年目に見る

\* 関連事業として、近隣他館と連携し  
「阪神・淡路大震災 語り継ぐこと／リレートーク」実施



阪  
神  
・  
淡  
路  
大  
震  
災  
か  
ら  
20  
年

展览会ちらし

さらに、第2部が3つのパートに分かれます。

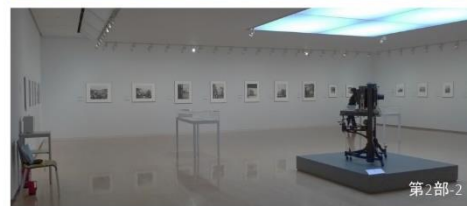
1つ目のパートでは、発災後20年間に美術館に起こったことを作品と資料でたどります。20年経つと、館内でも当時を知る人が減り、振り返らないと継承されない危機感がありました。これは、10年目にはなかった感覚でした。

## 20年目の企画

### 「阪神・淡路大震災から20年」

#### 第2部 今、振りかえる—1.17から

- 1) その時、美術館では 1995-2005  
20年に美術館で何があったか  
タイムラインに沿った作品と資料でたどる
- 2) 中山写真スタジオの「文化財レスキュー」  
当時、館外で行われた文化財レスキュー  
代表作とともに戦前の神戸風景を多く展示
- 3) 記憶を伝える—保存・修復と教育・普及  
美術館がこれから先に何を残していくか



全体としては、過去と未来、いろんなベクトルが重なるイメージです。震災は一人一人の個人的な経験としてしか語れない。だから、5年目にはディテールを集める展覧会をしたはずだった。けれど、当時を知る人が少なくなってくると、当事者の語りであるがゆえに、知

らない人を黙らせてしまう暴力性も出てくる。それを回避するために、いろんな時間と距離を含む展示にし、なるべく回路を多くしようとしました。

#### ◇リレートーク：当事者性

リレートークで常に話題に上がったのが当事者性の問題でした。阪神間の文化施設で、地域や歴史と関わる仕事をしていると、震災はどうしても向き合えないといけない。しかし、いわゆる「被災者」ではない職員もいて、「知らない自分が語っていいのか」という当事者性の問題が出てきます。

この問題を考えるとき、私がいつもよりどころにしているのが神戸で被災した詩人の季村敏夫さんの「死者こそ当事者である」という言葉です。

「そして事態の本質は、わずかにそれた場所、時間的にもはずれた余所者、非当事者の方が、背信の痛みを抱えつづける者の方が、より深い洞察力、受容的な構想力をもって把握できる場合があるのだ。」<sup>4</sup>

もう1つ、村上しほりさん（当時：人と防災未来センター 震災資料専門員）の、リレートークでの発言を紹介します。

「当時を知る人の声には神妙になりがちだが、特別視せず先人の声として捉えることが大事ではないか。」<sup>5</sup>

風化は悪いこととして捉えられがちだが、  
「風化というより質的な変容ではないか。時間が経てば変わってゆくのは必然で、悪いことではない。むしろ残されてきた資料や語りとの対話で得られる気づきという変化を含めて、記録してゆくことが必要だろう。」

#### ◇22年目

22年目に高橋耕平さんを招いた際も、作家が神戸という街での個の経験に着目した結果、一部震災に関わる展示となりました。人と防災未来センター所蔵の震災当時の写真を、神戸市の地面の上に置いて撮影した作品では、一見すると震災との関係が分からない日常的な写真が多く選ばれています。見る人によっては幅広い解釈が起きえる写真です。

---

<sup>4</sup> 出典：季村敏夫『災厄と身体—破局と破局のあいだから』書肆山田、2012年、p.108。

<sup>5</sup> 出典：江上ゆか「20年目の震災」（リレートーク報告記事）、兵庫県立美術館ニュース『アート・ランブル』48号、8頁。



高橋耕平《街の仮縫い、個と歩み》より《神戸市のベンチ－避難所での配給》カラー写真 2016年  
引用資料＝避難所での配給一例写真 | 資料提供者：神戸女子短期大学 | 人と防災未来センター蔵  
展示風景撮影：表恒匡

#### ◇「モノ」を残すことの可能性

「モノ」が保存されることで、未来に様々な使われ方・解釈がなされる可能性が引き継がれます。ただ、「モノ」を残すには膨大なコストがかかるので、持続可能なシステムを作ることが課題です。また、利活用されてこそ「モノ」は活きた資料となるけれど、活用すればするほど「モノ」は傷んでしまいます。

さらに、現代美術では「モノ」として残しづらい表現の形式が増え、映像や写真といった最近のメディアは、ここ数十年でも再生できない形式が増えてきています。

【「本にして綴じる」という技術（アート） 「阪神大震災を記録しつづける会」25年の活動を紐解く\_\_高森順子】

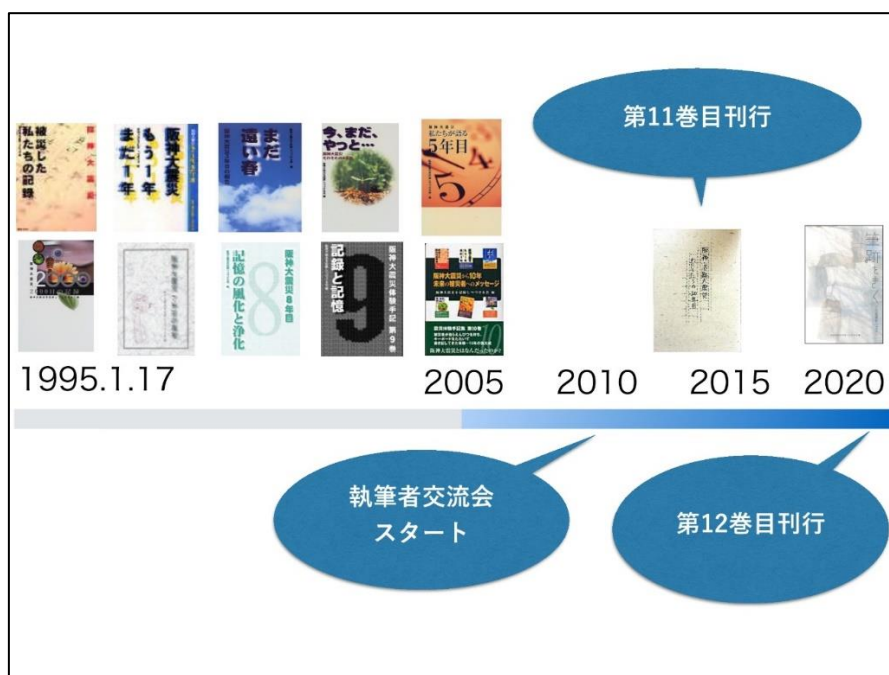
わたしは、1995年に、六甲アイランドで震災にあいました。震災から13年後、語り部を研究するつもりで、災害伝承をテーマに大学院に入りました。その後、教授のすすめで、亡き伯父が代表をしていた「阪神大震災を記録しつづける会」に参加し、交流会、手記集やインタビュー集を作るに至っています。そこから、同会を対象に、執筆者の人たちと一緒に研究活動をし、それを論文にしていくアクションリサーチという研究スタンスをとっています。

#### ◇「阪神大震災を記録しつづける会」の変遷

「阪神大震災を記録しつづける会」は95年5月末の第1巻出版から10年間、毎年1冊ずつ手記集を出していました。10年間は続けると伯父が宣言し、なんとか続けてきた団体でした。10巻、全部で434篇の手記が収録されています。

阪神淡路大震災の頃、ブログやSNSもまだなく、個人が自分の言葉を発信する方法はほぼありませんでした。そんな中で、新聞の広告欄や避難所でのポスター掲示で手記を募集し、紙に書いて郵送してもらっていました。

私は、2010年に執筆者の交流会をやるという形で事務局長として実質的に参加し、2015年に11巻目の手記集を、2020年には『筆跡をきく』という執筆者へのインタビューと手記の入った本を出版しました。







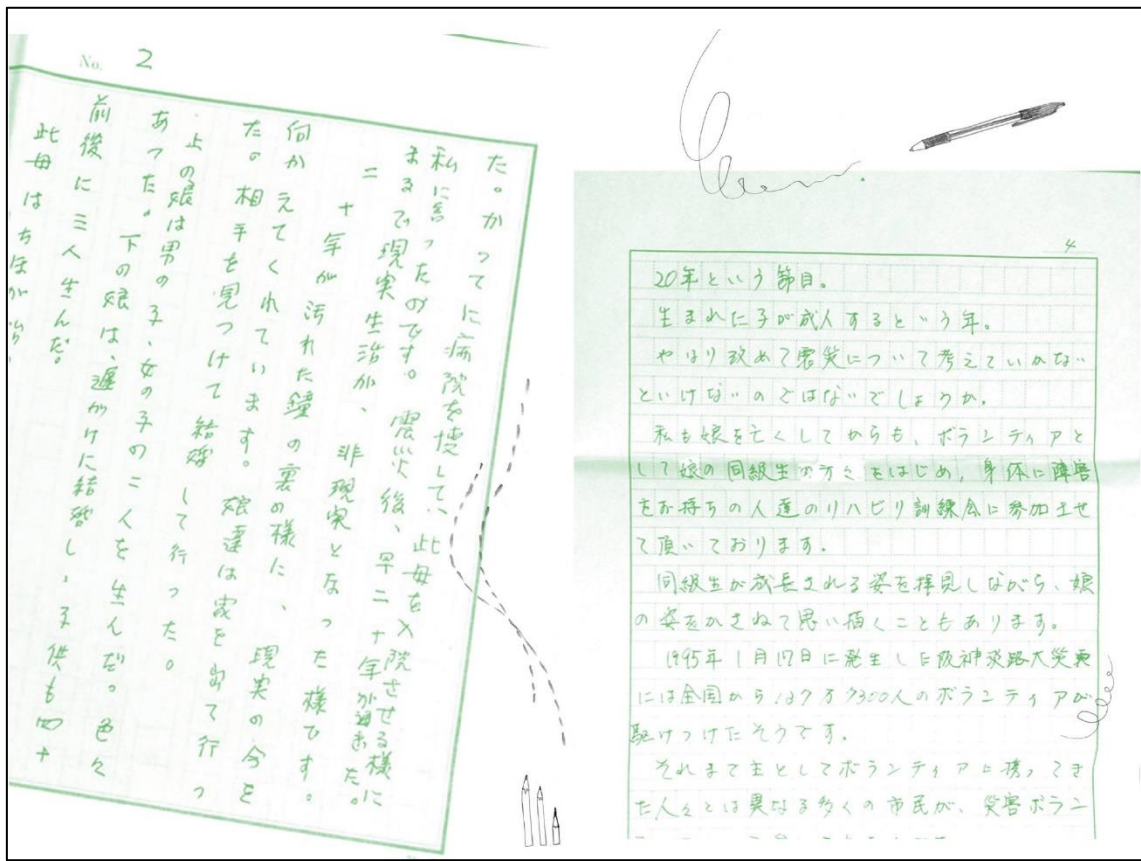
#### ◇20年目の手記集をつくる

2010年から年に一度、執筆者の交流会を始めました。

東日本大震災が起きてから初めての会では、交流会をしているだけではダメなんじゃないか、我々がやってきたことには意味がなかったんじゃないか、という声があがりました。そこで、原点回帰して手記集を作ることになりました。積極的な選択というよりも、やむにやまれず始まった活動でした。

この時は、伯父が編集した10巻の手記を踏襲した上で14篇を収録しました。11巻目をきっかけに過去の手記を読んでほしいと思い、手記の右下には、執筆者の過去の手記の収録巻を記しました。過去10巻分の手記集はネット上に全文公開しています。

また、実際の手書き原稿をコラージュしたページを、手記の間に挟みました。普段パソコンでやり取りをする執筆者でも、当時のように原稿用紙で書いてくださった方がたくさんいたため、原稿用紙の生の筆跡を表しました。



◇手記を書くこと

20年目の手記集を作った時に出版記念会をしました。手記執筆者で、小さなお子さんを亡くされた小西さんは、一部の会の参加者のように（語り部などの）活動していないのを申し訳なく思うということ、それから、今回も書くか迷ったけれど、手記を読んだ方から「希さんは大切なお仕事をしていますよ」と言われたことが後押しになったと言っていました。

眞治さんは、明るく淡々と、カラッとしている方ですが、出版記念会の際は泣いておられたこと、記録しつづける会が支えになっていとおっしゃったことがとても印象に残っています。

◇25年目『筆跡をきく』

震災から25年目には、『筆跡をきく』という本を出版しました。ここでは、執筆者にいつ・どこで・どのように手記を書いていたのかをききました。つまり、震災体験者としての言葉ではなく、手記の表現者としての技についてのインタビューです。

『筆跡をきく』では執筆者へのインタビューの後に、その方の手記を掲載しています。話し言葉が最初に来る構成のおかげで、手記だけではしんどくて読めなかったが、『筆跡をきく』は読めたという人もいました。



31 / 40

#### ◇『筆跡をきく』から飛び火した

防災・減災では、結論として教訓が求められるので、簡単に集約できないことが書かれる手記集とは相性が悪く感じてきました。そんな中で、アートブックという文脈で『筆跡をきく』に興味を持ってくださった方々のお誘いで、アートブックフェアに出品しました。

また、国会図書館で『書籍から見える景色』という書評をいただいたり、瀬尾夏美さんらが東日本大震災の手記を公募する際に、会の活動を応用して下さったりしました。

こうした経験から、会の活動が別の形で飛び火したと感じました。私がいなければこの活動は消えるという気負いが解け、引き受けてくれる人たちも出てくるんだと気づきました。

#### ◇活動を飛び火させるために

会の活動は特定のコミュニティに閉じたものではありません。手記は、関心のある人が中心に出会うものではありませんが、全く見知らぬ誰かからの応答がある可能性もあるメディアです。

ある特定のコミュニティのためにやっていた活動＝「コト」が、本や報告書、ニュース映像＝「モノ」になっていくことで、コミュニティの外に出会えるのだと思います。これは、活動を運動にしていく時にとっても大事になります。

◇継承のバトンリレーは「手」から「手」へ渡らなくていい

継承は、リレーの比喻で表現されることが多いですが、直接的に手から手へ渡らなくていいと考えることがすごく大事です。

私が「記録しつづける会」に参加した時には、伯父が亡くなって5年が経っていました。もし伯父から直接誘われて、活動が手から手へ渡っていたらやれなかったかもしれない。伯父とは身体的にはもう出会えない状況になっていたからこそ、改めて読んでみようと思えました。

そう考えると、「記録しつづける会」にとって「本」を綴じることは、いつ活動を終了してもいいように仮に綴じる練習をしていたと言えるんじゃないか。継続の方法を考え続けるのではなく、いつか誰かが引き受ける可能性を考えて、ポジティブな意味で終了の在り方を考えていくことがより良い活動を作るのではと思っています。そして、もし中断してしまっても、バトン＝「モノ」をどうやって探し出すか、どう解釈するかという技術をみんなで話し合い、考え、共有していけるのではないのでしょうか。

### 【質問やコメント】

清水：私は、福島県の浪江町の出身です。高校2年生で東日本大震災にあい、その後原発事故で県外避難をしました。大学卒業後、東北に戻り、子どもの支援活動をする中で、子どもたちの声で震災を伝えたり、若い語り部と子どもが共に語る場を企画したりしました。現在は、震災当時子どもだった人たちの声を発信する活動や、その周辺の人が集うコミュニティを作っています。

私は、自ら語り部を名乗って活動をはじめたのではなく、周囲に促されて話したら「語り部」と名付けられてしまいました。もちろん自分の経験から何か感じ取ってほしいからこそ活動していますが、ある意味で、活動させられているような感覚があります。

また、当事者とされるがゆえに正しいものとして扱われ、距離をとられてしまうので、聞き手と対等に話すために試行錯誤が必要です。

高森：経験した私が語らねばという必然性と同時に、語り部になったのは偶然であると正直に言っていると思います。自分の中にある2つを打ち消しあわないことが大事です。聞き手のもつ語り部のイメージを解体していくのも語り部の役割ですし、あるひとつの語りを教訓のための材料としてのみ使うことを回避する姿勢にもなります。

さらに、公共のメッセージや語り手同士の間においても、価値観や体験が異なっても打ち消しあうことはないと考えられる環境になったらいいと思っています。

山名：「モノ」には「もののけ」「もの思い」のような曖昧な、とか意味を揺さぶる「モノ」という意味もあります。ミュージアムは「モノ」に向きやすいですね。また、手記執筆者にとっては、よくわかんないけど定期的に現れて言葉を聞きいていく高森さんは、揺さぶるという意味の「モノ」的な存在とも言えるかもしれないと思いました。

瀬尾：東日本大震災と阪神淡路大震災という2つの災禍は、同時代的に各地のプレイヤー同士が出会い、議論していけるという点で、貴重な関係性であると思います。阪神の先例を聞ける。東日本があったからこそ問い直しが起きる。セットで考えていくことかなと感じました。

東日本大震災から12年経ち、被災当時子どもだったひとたちがリサーチ・表現をし始める動きがあります。30年経つと2世代くらい変わって出来事の触り方が異なってくるのではと思うのですが、阪神淡路大震災に関わるアーティストの動きは新しく起きていますか？

江上：小さい時に被災体験をもつ作家が、広い意味で震災に関する作品を作っている例を見たことがあります。東日本大震災についても、高橋耕平さんの作品のような記録物を用いた間接的な表現がこれから起こっていくかもしれませんね。

瀬尾：防災・減災的な意味での震災継承の展示もある中で、現在も美術館として震災に関わる表現を市民に開いている狙いはどこにありますか。

江上：震災は、偶然その場所にいた人にとっては、ライフストーリーの中に普通に出てこざるをえない出来事です。例えば、私にとっては、学芸員として地域の美術を考えた時に見逃せないものです。だから、残し、記録し、紹介する。震災は大きな出来事として焦点が当たるけど、地域や土地の記憶を扱っている色々な要素の絡み合いの中にあります。全てが現時点で解決しきる必要はないかもしれないし、回路がたくさんあるほうがいいと思うんです。

武谷：遠足プロジェクトでは、時空間的にも文化的にも離れた様々な地域を巡回し、非当事者が、被災者に届かなかった支援物資のランドセルを媒介として間接的な伝承を試みてきました。でも、僕らの経験の共有の仕方は「継承」ではないという批判もあって、許容してもらえない場合もあります。時間が経てば、許容されるのでしょうか。

高森：「継承」「伝承」という言葉には、非対称な印象があります。分かっている者から分からぬ者への啓蒙というイメージが想起され、二者が分断されてしまうからです。私は「分有」という言葉を使っています。哲学者ジャン＝リュック・ナンシーの言葉「分有」は持つ者から持たざる者への譲渡ではなく、人々が共同で所有していることを前提とします。みんな持っているけど、その見え方が違うと考える。

武谷：遠足プロジェクトも、「継承」「伝承」じゃなく、「アクション」という言葉はフィットすると思います。それによって、型にはめられずにプロジェクトの核が伝わるのではないのでしょうか。

瀬尾：展覧会や本によってアクションの蓄積を区切り、記録していくことの連続の中で、誤配<sup>6</sup>が起きえる気がします。アクションを積み重ねて、100年続くと「継承」と呼ばれるみたいな。そこでやっと、ある経験が個人から解き放される。

災後30年、10年では、「継承」という言葉使うには早すぎるのかもしれませんが。

江上：阪神・淡路大震災の後、あれだけ多くの人が絵を描いたりしたのは、なにかせすには居られなかった反応ですよね。同時に、あえて何もしないという反応をしたひとも居て、それは時間を置くためでした。特に芸術は遅い分野なので焦っても仕方がないと言うことがあります。

---

<sup>6</sup> あるものがある場所にきちんと届けるシステムを指すのではなく、むしろ、誤配すなわち配達失敗や予期しないコミュニケーションの可能性を多く含む状態。(東浩紀、『観光の哲学』, 2017, p.158)

高森：応答というか、Re"action"ですよ。

編集／井元遥花、瀬尾夏美、梶原千恵